

# ヘーゲル「論理學」の理解

脇 坂 光 次

## 序 論

ヘーゲルに於ける辨證法は辨證法的過程として理解せられるのが普通である。定立が反定立を呼び、其等が綜合の中に止揚せられ、更にその綜合が次の展開の定立となつて、それに對する反定立を生じ云々の無限進行の圖式を以て示される。如此、辨證法を單なる過程として理解する時は、人は彼の「論理學」に於いて自己の解釋的意識とは全然趣を異にするものに出會はねばならないであらう。そこで速斷して次の判決を言渡すのが常である。ヘーゲルが辨證法的過程によつて、絶對的精神に到達すると考へたのは辨證法そのもの、發展の本質とは根本的に相容れないものである。其處に彼の體系の破滅があり、精神の現象學の出發點の意圖に叛いて發出論、演繹論、汎論理主義的形而上學等々となつた。私は後にその理由を明にする如く、ヘーゲルに於ける辨證法的方法的意義を理想主義的觀念論に於けるが如く、その方

法によつて對象に近迫してその對象を捕捉するものと解することは出来ないと思ふ。此の事は「精神の現象學」の序文によつても理解し得ると思ふ。成程ヘーゲルはシェリングの知的直觀の同一哲學を學としての哲學の立場からそのまゝ承認する事を拒んだ。とは云へその事は同一哲學の立場を全然排除する事を意味するものではない。即シェリングの同一はその中に媒介的契機を止揚し行く展開が缺けてゐるが故に、知識的には抽象的同一として、その中に於ては「すべての牝牛が黒くなる夜」であると云はざるを得なかつた。恰も萬物がその中に消え行く深淵としてのスピノーザの實體の如くであるが故に。夫故にヘーゲルは眞理は結果のみにあるのではなくして過程と共にあることを常に主張する。とは云へその反對に眞理は單に過程のみにあるのではない。過程は結果の過程としてのみ過程である。過程は媒介的契機として自らを媒介する事によつて媒介としての働きを止揚する。即結果 (Resultat) となる。夫故結果は直接的なるものではなくして、媒介せられたるものとなる。それでは結果は過程を通じて結果となるとするならば依然として結果は過程の近迫極限とならねばならぬではないかと反問せられるでもあらう。夫故に私は過程と結果との關係、即過程の媒介的意義、その媒介による結果の媒介せられて

くる在り方を問題とせなければならぬ。此の事は辨證法的方法的意義を理解する上に缺く可からざる事と思はれる。

ヘーゲルが彼の「論理學」を展開し行く時、思索上用ひてゐる根本的なる契機は彼自ら語る所に従つて次の三者に總括し得ると思ふ。

- 1) das abstrakte oder verständige Moment
- 2) das dialektische oder negativ-vernünftige Moment
- 3) das spekulative oder positiv-vernünftige Moment

以上三つの契機はあらゆる論理的・實的なるもの (das Logisch-Reelle) の契機として相互に關聯して「論理學」を動かし行く魂であるとは云へ其等の契機は直に夫々「論理學」の三部門を成すものではあり得ない。此の事に對して人は或は何故に此等の三契機が「論理學」の三部門を成さないのかと反問せられるでもあらう。成程、第一の契機は「有論」、第二の契機は「本質論」、第三の契機は「概念論」に一應配當せられて差支へない如くに思はれる。然し私はヘーゲルが以上の僅かの言葉によつて、自己の「論理學」の諸部門と論理的者に含まれてゐる思索法の諸契機との關係について特色付けた深き意味をかく無雜作に修正變更しようとする人には、彼の「論理學」の理解の上からし

て同意する事は出来ない。その理由は後に明にせられるであらう。私の此の緒論の主意も以上の言葉の貧しき解明に外ならない。それによつて彼の「論理學」を明にし行く手がかりを得ようとするに外ならない。

扱、先きに過程と結果との關係を明にす可き破目となつた。此の事は以上の思索法の契機から云ふならば、第二の契機と第三のそれとの關係を明にする事に歸着する。夫故に以上の三契機は相互に内面的な關聯を形成してゐるとは云へ、先づ此の二契機の關聯の闡明から始めねばならない。

一般に方法は對象に關する方法である。夫故に辨證法の方法的意義を明にする爲めには、その對象が明にせられねばならない。處で又對象は方法によつて近づき得る。それでは辨證法も亦それによつて、その對象に近づき得可き意味に於ける方法であらうか。ヘーゲルは彼の哲學史の講義の中に「哲學する事を始めるものは、先づ以てスピノチストであらねばならぬ。」と語つてゐる。人は辨證法の根源的理解の爲めには、従つてその對象の何たるかを知るには先づ最初にスピノザ主義者であらねばならない。勿論スピノザのスピノザ主義者に終始する必要はない。却つてかゝる立場に終始するならばその人も亦辨證法の媒介的意義を理解し得な

いであらう。何故ならばスピノーザにあつては神即自然であつてその間に媒介がない。従つて彼の神學は抽象的普遍によつて考へられた。それは自らの對象とは似つかはしからぬ方法であつた。かくも具体的なる對象が幾何學の秩序によつて考へられるとは。彼は自らの病氣(Schwind-sucht)に相應しくあらゆるものをその中に verschwinden lassen せしめた。神祕派の掃蕩的方法と等しく „harte Methode“ であるとして何であらうか。此の如きものは哲學的にはバルメニデスやアンゼルス等と等しく抽象的同一によるものである。夫故にヘーゲルは「有」と「無」とを並べて「論理學」の端緒に置いた。而かも兩者は論理的には同一なるものとして示された。勿論兩者の對象は正反對なるものではあるが。バルメニデス等の如く「有」の對象に相應しき論理的思惟が同一律、矛盾律によるものであるとするならば、而してその正反對なる對象「無」及びその方向に考へられるものゝ論理的思惟が同一のものに止るとするならば、後者の對象と論理的思惟との間に於ける乖離は始めからして約束せられてゐる。従つて若しもバルメニデスの原則(それはやがてアリストテレスの論理となる)を固守してスピノーザ的對象の方法たらんとするならば、その意圖そのものが最初からして無謀であること云ひ得るであらう。アンゼルス等の基督教神學即神

の存在論的證明は證明として失敗を約束せられてゐる。ライブニッツは矛盾律を嚴守した故表象はモナッドから泡の如く浮び上つてくるにとゞまつた。スピノーザではヘーゲルの「論理學」の最初にかゝげられた「有」と「無」が直に結合してゐるが故に、彼の神學は顛倒したる神學とならざるを得なかつた。何故ならば媒介の止揚の仕方が外的であり、規定性を單に掃ひ去るに過ぎないならばその時働いてゐる普遍は抽象的普遍であつて矛盾律の圈内を出でないから。眞に哲學するものは先づ以てスピノチストであらねばならなかつた。處で又その内容に相應しき方法を得んとする者は最早やスピノーザに於ける如く論理的にバルメニデスの學徒である事は出来なくなつた。即その對象は必然的にバルメニデスとは正反對なる方法言葉を換へて云ふならば矛盾律の支配する方法とは正しく反對せる方法を要求し來るわけである。此處に人はヘーゲルのヘラクライトスへの接觸を理解する根據を見出すであらう。「有」と「無」とは直に結合せられるのではなくして「成」によつて媒介せられるのである。「無」は「成」によつて媒介せられたるものとして示されねばならない。其處にヘーゲルの哲學としての、スピノーザ哲學の止揚が行はれる。先づアリストテレス的論理の止揚者である事こそ、その對象に相應しき思索法であるであらう。

處で直にある論者はヘーゲルの「矛盾は存在するもの、魂である」。どの考に對して小心にも、それは矛盾律を犯すもの、眞面目を缺くものとして抗議を提出するでもあらう。然し、對象との關聯に留意する事無きかゝる非難には我々は此處で取り合ふ暇を持ち合せない。何故ならば哲學の門に入るものは先づ以てスピノチストである事が前提せられてゐる。而してヘーゲルの矛盾の考はその對象が必然的に要求し來る方法に外ならないから。

以上に於いてスピノーザの對象に相應しき方法がスピノーザとは正反對たる可きことを知つた。即スピノーザの眞の哲學的止揚はスピノーザの持てる眞理内容を始めから考慮の中に入れざる觀念論者や、又スピノーザのスピノーザ主義者として止まらんとする實在論者の何れでもあり得ない事を知つた。夫故にヘーゲルは云ふ、眞に反駁せんとするには反對者の力の中にと入り込み、彼の支配する圈内に自らを置かねばならない。彼の外にあつて彼を攻撃し、彼の居ざる處にあつて自らの正當さを主張せんとする事は事柄の要求しない處である。夫故、スピノーザ主義の唯一の反駁は、先づ以て彼の立場が本質的なるもの、必然的なるものとして承認せられる事、然し第二に此の立場が自らの中からして、より高き立場へと高められる事に

644.

のみ存する。」と。従つてかゝる課題の解決が彼の「論理學」の骨子となる。スピノーザは悟性的であつた。自らの思辨的境地を出る事を恐れた。彼は否定的者 (passive) からよそ／＼しく眼を外らす事によつて、即云はゞ外的に規定性を掃ひ去る事によつてより以外に止揚の方法を知らなかつた。ヘーゲルは運命の女神の顔を覗き込んだ。神は具體的となる爲めに一度自らを否定しなければならぬ。然し同時に其の時自己との對立者に於いて尙自己を保持する方法と勇氣とを得た。ヘーゲルの力強き言葉が此處に思ひ出さる可きである。「然るに死の前に逡巡ひ、朽ち果つる事から清らかに自らを守る生ではなくして、死をば堪へ、死の中に於いて自らを保つ生が精神の生である。精神は絶對的分裂の中にあつて、自らを見出すが故にのみ自らの眞理を獲得する。精神は、恰も我々が何物かについて、此は無である、或は間違つてゐると云つて、たゞそれでその事に結着をつけて、そこを去つて何か他のものへと移り行く如く、否定的者から眼を外らす事によれる積極的なるものとしてののかゝる Macht ではなくして、精神は否定的者の顔を覗き込み、そこで彼と取組む事によつてのみかゝる Macht である。かゝる果し合ひが否定的者を有にと轉ずる魔力である。」<sup>\*\*\*</sup>こゝに人は自らを否定したる神が否定的者と取組み、否定的者を排棄する事



なく、自らの中に止揚し行く、従つてその意味にて否定的者に對する完全なる勝利の聲を聞き分けねばならない。ヘーゲルが否定の否定として特色付けた綜合の眞意は、かく敵の眞只中に於て尙且自らを生かし行く事を知る魂に外ならない。それは又辨證法を動かし行く魂である。否かゝる魂によつてのみ辨證法的綜合は可能である。此が先に掲げた論理的者の第三の契機たる「積極的理性的、或は思辨的なるもの」に外ならない。ヘーゲルも、思辨的なるものを規定性のその對立に於ける統一、即眞に積極的なるものとして特質付けた。それは實にニコライ・クザヌース以來神秘派の所謂「反對者の同一」と稱せられるものに外ならない。従つて又シェリングの同一哲學の基礎命題たる「同一」に外ならない。然し此等にあつては否定的者の媒介の敘述を缺いてゐる。「精神の現象學」の示す道行きが缺けてゐる。即積極的なるものは否定的者を通じて、それによつて媒介せられてあるものとして、即 Resultat として示されてゐない。否定的者の媒介、それが「辨證法的なるもの」に外ならない。否定的者の媒介は自らを媒介する事によつて自らを否定する。即 Resultat としての綜合は媒介せられたるものとして、その中に辨證法的契機を止揚してゐる。此處に私は「精神の現象學」と「論理學」との關聯について一言述べて置きたい。「精神の現象學」は意

識の經驗の學として意識の側から否定的者の媒介を通じて漸次に勢位を高めて思辨的綜合の中にと止揚せられ行く道行きである。反之「論理學」は意識に對する辨證法的媒介は止揚せられたるものとして、即意識經驗に對しては辨證法的媒介の「Resultat」としての立場に立つてゐる。従つて前者に於いては辨證法的契機が「論理學」に於けるよりも鮮明にその機能を意識に對して、顯示してゐる。夫故に「精神の現象學」によつて彼の哲學に近付かんとする事は辨證法的契機を理解する上には相應しき方法である。然るに「精神の現象學」に於いても既に明である如く、かゝる否定的者の媒介によつて、思辨的統一の境地が綜合的に近付き到達し得るとは主張し得られないであらう。ある人も云ふ如くそれは實に歴史的にシェリングの知的直觀の內容的解決でもあり得る。<sup>\*\*\*</sup>従つて辨證法はかゝる意味にては分析的方法でもある。實に辨證法的綜合に於ける辨證法の方法的意義は思辨的綜合の視點から、合理化の領域、ヘーゲルの言葉をかりるならば「抽象的なるもの或は悟性的なるもの」を自らに關係付ける秩序の方法に外ならないと云ひ得るであらう。夫故辨證法は常にその「Resultat」としての綜合に對して分析的に働くとも云ひ得るであらう。此の事は否定的者の媒介即意識經驗に對する辨證的契機に中心を置いたる「精神の現象學」に反し

て「眞の哲學」としてその純粹なる契機を取り扱ふ「論理學」に到つて益々明白となる。勿論論理學に於いては意識に對する辨證法的展開の道行きは通り來つたものとして前提せられ、自らの背後に持つが故に、意識に對しては辨證法的側面が「精神の現象學」に於けるよりも不鮮明とならざるを得なかつたとは云へ。

\* Hegel: Wissenschaft der Logik II, S. 218 (von Lasson)

(以下特に断り無き場合は Lasson 版によるものとす)

\*\* Phänomenologie des Geistes, S. 22

\*\*\* N, Hartmann: Hegel, S. 167

以上に於いて私はヘーゲルに於ける辨證法的綜合の中に辨證的側面と思辨的側面との両者が結合せられ、辨證法は後者即對象無き對象の媒介的方法として、自ら媒介する事によつて媒介的役目を思辨的綜合の中にと止揚し、後者を媒介せられてあるものとして即 Resultat として示さんとしたものである事を指摘し得た。夫故又辨證法は Resultat に關する媒介の方法でもあり得る。従つて辨證法を單に過程としてのみ見る時には、ヘーゲルに於けるその方法的意義並に概念的綜合の意義は理解し得られないであらう。否、尙一步進めた言ひ方が許されるならば、辨證法的に見得る事を可能ならしめるものは概念的綜合に外ならない。概念的綜合が自らと、

ロゴスの世界(此處にロゴスの世界とは、ヘーゲルの理性の如く宇宙萬有を貫く理法ではなくして、普通の意味に於ける限定し、秩序付ける合理化の領域を云ふ)とを關係付けんとする時に、辨證法がその關係付けの方法となり得る。ロゴスの世界に於ける媒介の仕方綜合の仕方をもみ人が固守するならば、その人は辨證法に於ける媒介の仕方綜合の仕方には縁無き人である。夫故ヘーゲルは明に此の兩者の媒介の仕方の區別について語つてゐる。

Im gewöhnlichen Schliessen erscheint das Sein des Endlichen als Grund des Absoluten; darum weil Endliches ist, ist das Absolute. Die Wahrheit aber ist, dass darum weil das Endliche der an sich selbst widersprechende Gegensatz, weil es nicht ist, das Absolute ist. In jenem Sinne lautet der Satz des Schliessens so: Das Sein des Endlichen ist das Sein des Absoluten; in diesem Sinne aber so: Das Nichtsein des Endlichen ist das Sein des Absoluten. (Logik, II, S. 62)

勿論ヘーゲル自身、その「論理學」の持てる特異性の爲めに、ロゴスに於ける綜合の仕方と辨證法的綜合との區別を不鮮明否混同せしめるかの如き傾向を有してゐる。媒介の仕方に關する詳細なる研究は本論に譲ることゝしたい。従つて又カントの純粹統覺の綜合の性質とヘーゲルの概念の綜合的性質との關係の興味ある問題に

深く立ち入る事は後の機會に譲らねばならない。此處ではたゞヘーゲルの辨證法に於ける綜合の性質がその對象の要求上、ロゴスの世界に於ける綜合とは似つかはしからぬものである事を指摘するに止めよう。普通にはロゴスの世界に於けるものが合理化の原理となつて、それに對するもの即偶然性が合理化の原理と綜合せられる。かゝる綜合の仕方にて非合理的者は絶えず合理化せられる意味にて媒介せられる。かくしてそれは無限の過程を畫くのである。然るに辨證法の媒介的意味は、それとは正しく反對に、ロゴスの世界即合理化の原理を有する領域は自らとは對立せる偶然性の中へと身を投じ、その中にあつて偶然性の威力に恐れて再びロゴスの世界へと逃げ込み、ロゴスの立場にあつて合理化するのではなくして、偶然性と顔を合して立つ事によつて偶然性の持つ威力を剝奪する事にある。かくてロゴスの世界は辨證法を通じて思辨的統一の境地との關聯に置かれる。その意味にて偶然性は概念化せられ、理性化せられる。即理解(Verstehen)せられる。「必然性の眞理」として特色付けたヘーゲルの自由とはかゝる理解化、理性化を爲す概念的なるものである。若しもかゝる理解化、概念化が尙且合理主義と呼ばれるならば、それは喜ばしき合理主義であらう。

如此辨證法的側面と思辨的側面との關係をその媒介の仕方、綜合の仕方から明にして行くならば、普通に無雜作に考へられてゐる辨證法の圖式に於ける綜合が次の定立となる事に對する根源的なる理解を得る事になりはしないだらうか。ある段階に於ける綜合が直に次の展開の定立となる事、の理解は一見自明と思はれる如く容易ではあり得ない。何故ならば定立はロゴスの世界として光の原理の支配する國であつた。而して思辨的綜合がロゴスの世界即定立と關係付けられる時に辨證法が成立した。即ち辨證法は定立の綜合への關係付けの方法であるとするならば、綜合の定立への關係付けは辨證法によつて可能であらうか。綜合の定立への關係付けと辨證法とは如何なる關係に立つものであらうか。我々にあつては綜合は常に思辨的綜合であつた。然るに又ヘーゲルに於ける辨證法の方法的意義からして思辨的統一そのものにかゝはる事は理性哲學としての本分ではあり得ない。それは常にロゴスの世界との關係に於いてのみ理解せらる可きであつたから。ロゴスは一般に固定化の原理であつた。夫故にかゝるロゴスの固定化を自らの中に持つ事なくしては、従つて單に萬物が流れるのみにては辨證法は一般に成立し得ない。かく思辨的綜合にのみかゝはるものは丁度ロゴスの世界にのみかゝはるものと等

しく辨證法は意味を持たない。夫故辨證法的媒介は常に固定化の領域を豫想してゐる。それに對する辨證法である。然るに又此の事はヘーゲルが深く洞察せる如く人間の歴史にとつては運命的に具はれる事柄である。何故ならば思辨的綜合は常にその粹をロゴスの世界に代表的に傳へるから。\* 何故にかゝる綜合はその粹を代表的にロゴスの世界に傳へるのか。

Er (Gott) spricht, und sie (Dinge) sind da. \*\*

と云ふ可きであらう。かくロゴスの世界への代表とは、ヘーゲルは論理的者の契機の中の「抽象的或は悟性的なるもの」が働くことに外ならない。夫故に綜合が定立となる時の「移行」に於いて働く論理的者の一側面は、見落されのが常であるとは云へ、ヘーゲルの「論理學」の理解には、缺く可からざる契機である。夫故に辨證法的なる契機の働き方から以上の如き悟性的なる契機の働き方は理解出來ない。辨證法はたゞ以上の如き悟性的者の働き方によつて生じたるロゴスの世界に對して意義を持つてくるのみである。何故ロゴスの世界に對して辨證法的側面が意味を持つてくるのか。ロゴスは一度代表せられるならば己自らの光の原理によつてその中に固定化を始め、己が地盤を忘れるに到るからである。

So werden die Gedanken wohl von der Seele erzeugt; aber der erzeugte Gedanke ist eine unabhängige Macht, für sich fortwirkend, ja, in der menschlichen Seele, so anwachsend, dass er seine eigne Mutter bezwingt und sich unterwirft.\*\*\*

かくの如く辨證法に於ける三契機の働き方を理解する時は、その展開は過程を畫き勢位を重ねて行くとは云へ、それは單なる過程ではあり得ないであらう。従つて止揚の中には、ロゴズに對する否定 (negierend) と、その綜合に於ける保存 (aufbewahrend) と、及び再びそのロゴスへの高揚 (aufhebend) とが含まれてゐるであらう。

\*綜合と代表との關係に關する根源的な理解はシェリングの「人間自由の本質」の中に示されてゐると思ふ。私が此處に用ひた代表の考もシェリングの次の言葉の理解から起る。

Die Repräsentationen der Gottheit können nur selbständige Wesen sein :.....(Schelling : Menschliche Freiheit, S. 18)

\*\* ebd, S.17

\*\*\* ebd, S.17

以上の如くにして私はヘーゲルが「論理學」を動かし行く魂としての論理的者の三契機の各々の内面的な關聯に於ける働き方を一般的な形に於いて示した。従つて辨證法的思考法の三側面は内面的に相關聯して「論理學」を動かし行く魂であるとは



云へ、それは直に「論理學」そのものではあり得ない。「論理學」に於ける辨證法的展開は以上の三つの思考法のからみ合つたる魂が「論理學」の場面に限定せられ、その中へと織り込まれてゐる限りに於いて働いてゐるのである。而して「論理學」の場面とはヘーゲル自らその端緒に於いて聲明せる如く「自然及有限なる精神の創造以前に於ける神の敘述」の場面に外ならない。それは思考法の契機から云ふならば「悟性的なるもの」の働いてゐる光の世界に外ならない。従つて「論理學」の中にて取扱はれてゐる實在性は論理的實的なるものとして少くとも先づ以上の如き場面によつて限定せられた限り、その中に入り來る實在性に外ならないのである。即

Das System der Logik, ist das Reich der Schatten, die Welt der einfachen Wesenheiten, von aller sinnlichen Konkreten befreit.\*

夫故にヘーゲルの「論理學」を目して汎論理主義、發出論と刻印を付する過誤は「論理學」の中にて取扱はれてゐる實在性、従つて辨證法的綜合による思考法の三契機が「論理學」の場面の中に織り込まれてゐる在り方に注意せざる事からして起るものと云ひ得るであらう。更に此の事からして、ヘーゲルの「論理學」は「自然哲學」に移る時に「論理學」に於いて到達したる結果を自ら止揚して他在となつたのは自らの汎論理主義

654

と矛盾するものではないかとの屢なされる非難の不當なる事をも示し得ないであらうか。ヘーゲルが「論理學」を動かしてゐる魂と「論理學」の最後に到達したる尖端に於いて働いてゐるものとを區別すれば、此の難題にも辯護の道を見出し得るであらう。「論理學」の最終即理念は概念と實在性とが統一せられたるもの即滿されたる概念として具體的なる統一即思辨的契機の働くものと考へられるとは云へ、以上の理由によつてそれは尙光の原理即抽象的或は悟性的なるものが最高に働く點である。此の事はヘーゲル自身の次の言葉によつても疑はれないであらう。

Zweitens ist diese Idee noch logisch, sie ist in den reinen Gedanken eingeschlossen, die Wissenschaft nur des göttlichen Begriffs. Die Systematische Ausführung ist zwar selbst eine Realisation, aber innerhalb derselben Sphäre gehalten.\*.\*

従つて若しかゝる點を固守するならば、それが如何にして他在となり分裂するかは到底理解し得られないであらう。ロゴスの世界を固守し、その立場の思考法を働かすことによつて此の事柄を解かんとするならば、それは永遠に解けざる課題として残るであらう。ヘーゲルはかゝる愚鈍なる考方にて問題を解決しようとはしなかつた。バルメニデスの拘束は免れてゐる。夫故にヘーゲルは云ふ。眞理は常に

具體的統一である。他在は既に成されてゐる。分裂は既に行はれてゐる。かゝる抽象的同一から如何にして他在となるかは哲學が答へるを必要としない處である。抽象的同一は具體的統一の契機として常に理解せられる可きである。\*\*\*夫故に「論理學」の場面に視點を置くならば「自然哲學」への移行は絶對的他在として特色付けられてゐるにすぎないのである。具體的には「精神哲學」の即自態として理解せられる可きである。それでは何故にかゝる體系の説き方をするのか。それは概念上哲學するものは先づスピノーザ主義者から始めねばならぬとのヘーゲル自身の要求からして起るのであらう。従つて「論理學」の最後に於いて絶對理念をも止揚し行く「決心」なる言葉によつて示されたる意味深き考も此處にその理解の緒を見出す事になりはしないだらうか。「有論」から「本質論」へ「概念論」に於ける「主觀性」から「客觀性」へ更に「主觀性」の「概念」から「判斷」へ等々の移行に關する事柄も同様にして解決し得ると思ふ。たゞ其等は「論理學」の場面に更に夫々の特色ある場面の性質によつて限定せられてゐるのである。更に又「有論」「本質論」は夫々純粹論理、先驗論理に一應對應するとは云へ、其等相互の關係を論ずるには「論理學」自身が以上の如き基礎的構造を持つてゐるが故に、その構造の上に更に夫々の場面の特色の中に織込まれてゐる思考法

の織込まれ方を明にせなければならぬ。如此にして私はヘーゲルの「論理學」を理解するに際して「論理學」に於いて働いてゐる思索法の聯關及それが「論理學」に於いて織り込まれてゐる在り方「論理學」の夫々の部門の闡明には更にその上に夫々の持つる場面の特色との結合せられてある在り方を常に意識して、それを手がとりとしながら此の荆棘に富めるロゴスの國に踏み入らねばならぬ。

\* Logik I, S. 41

\*\* Logik II, S. 505

\*\*\* Phänomenologie des Geistes, S. 109 ff.

かつて神に醉える人スピノーザは一世紀の久しい間、無神論者の張本人として異端視せられた。獨逸詩人の間に復活せられる迄はスピノーザ主義とは無神論の別名を意味した。然るに人も知る如くヘーゲルがスピノーザを辯護して無神論ならぬ無世界論であることを指摘したる事は、スピノーザの精神を理解せる千言萬句を絶せる金言と云はねばならない。而かもそのヘーゲルが自己の體系の持てる外的條件の爲めに「汎論理主義」發出論「理念からの演繹」思辨的構成の祕密等々の名札の下に偏見無くしては理解せられなかつた。然るに今日ヘーゲル、ルネーサンスとして新しい光の下にその精神は漸次復活せられつゝある。而かもそれがその歿後百年の後であるとは。(未完)